

外国人に日本語を教える（06・08・19）

山 本 英 二（昭25・文丙）

始めに

二十五年文丙の山本です。三高三木会幹事の久保進（昭25文甲）から、私が日本語教師のボランティアをしていた「エストニア共和国」について何か話せと、今年の始めから依頼されていたのですが、実は一九九九年の三木会忘年会で、エストニアの歴史について説明し、その時エストニア人の留学生を二名連れてきて、彼女らにも話をさせたことがあります。また、私が何故エストニアに行ったか、その経緯については、平成十八年に出た『三高同窓会会報』一〇一号に書きました。まあ、エストニアも一昨年EUにも加入しましたし、最近の状況をお話してもいいのですが、幹事岩噌弘三（昭25理3）の方からは、最近日本語の問題が色々取り上げられているので、外国人に日本語を教えるのに、どんな

知識が必要か、面白い話題ではないかということで、本日のテーマにしたわけです。外国人と言っても、私が主として教えたのはエストニア人の高校生なので、それを中心にお話したいと思います。

何故私が日本語の勉強を始めたか、復習をしておきたいと思います。これは昭和二十一年に三高に入った時に遡ります。この年は旧制高校に軍関係者を入学させてはいけないういうGHQの指示があつてもめて、実際に授業が始まったのは九月でした。

国語の授業は池上禎造先生で、「源氏物語・帚木の段」から始めるとのことで、「ああ、古典の勉強か」と思っていました。先生が開口一番、「今はへははきぎ」と発音しますが、源氏が書かれた頃はへふあふあきぎ」と発音していたと思われ、「当時の日本語の母音の数は現在より多い八個であつたと推定されます」と話が進み、このような国語学という学問があつたのかと、大変カルチャー・ショックを受けました。

講義は続き、「例えば雪のへき」と、月のへきは現代では同じ発音ですが、万葉仮名の使い方から判断すると、当時は違う発音であつたことがわかります」と、やはり三高の先輩橋本進吉先生の「上代特殊仮名遣い」発見にいたる国語学の詳しい歴史を聞き、とても興味を持ちました。

大学では経済を学び、そのままサラリーマン生活を続け、六十三歳頃に退職後は何をしようかと考えた時に、池上先生の講義が頭に甦り、もう一度日本語を勉強してみようという強い気持ちを起こさせたのです。

大学に再入学する手もあったのですが、時間的、金銭的な問題もあり、朝日カルチャーセンターで「日本語教師養成講座」というのが、大学院並みの講座で、「文法論」「語彙論」「音声学」等興味深い講座があるのを知り、申し込むことにしました。この講座には定員があり、試験があつて、倍率は二倍以上だったと思います。久し振りで試験を受けたわけです。一九九四年四月から受講を始めたのですが、確か翌年の三月に三高「十八日会」が八重洲で開かれた時に、二十四年一修の前田典夫（文甲）が来ていて、「山本さん、エストニアという国で日本語の先生を探しているが、行く気ありませんか」と言うのです。彼に日本語を勉強しているという話をした覚えはないのですが、誰からか聞いたらしい。彼は児玉麻里というオルガン演奏家のマネジャーの仕事をしており、彼女がエストニアでのオルガン・フェスティバルに出かけた時に、通訳代わりをしてくれた外務省の役人から日本語の先生を探して欲しいと頼まれたのだそうです。

「エストニアってどこにあるの」と思わず問い返しました。バルト三国の一つであることはわかったのですが、その国に対する知識は全くありません。児玉麻里さんに会って、

直接説明を聞くことにしました。結局、その年の夏に行われるデンマークとエストニアでのオルガン・フェスティバルと一緒に、家内も連れて同行することになりました。

エストニアの首都タリンについて、日本語を独学で勉強していた外務省のヘイキ・ヴァラストさんという方に会い、大体的様子を聞きました。ヤルヴェオツァ高校というところに、既に笹川財団（現日本財団）から日本語教育用のLL教室と辞書、教科書等を寄付してもらったが、教師の派遣を日本政府に申請したが断られたとのことでした。そのヘイキさんが外務省に出勤する前に授業をし、たまたまエストニアに来ていた日本人女性を講師にお願ひしているが、どちらも来年までしか授業できないという状況でした。

到着した翌日、日本大使館の代理大使の案内で、学校を訪ね、校長に会いました。「今年の九月の新学期からでも来てほしい」との要請でしたが、それはあまり性急なので、翌年の一九九六年九月から二年の契約をしました。給与は現地の先生と同じで月三万円で、勿論赴任費も、住宅費もありません。まあ、ボランティアに近いものです。

一九九一年まで五十年余もソ連に占領されていたお蔭で、まだ民衆の生活程度は低く、日本で言えば昭和三十年代の様子でした。でも、知的レベルは高いようで、一応ヨーロッパの町という感じでした。

その翌年の一月末、エストニアの一番寒いと言われる季節にもう一度訪問しました。ど

れくらいの気候か経験したかったのですが、思ったより寒くなく、雪も積もっても三〇センチほどのようでした。寒さが苦手な関西人の我々でも暮らせると思いました。

その時、高校で模擬授業をしましたが、まあ、なんとかやれそうだと自信を持ちました。だが、家内が一週間の授業が二十四コマでは、年齢的に無理だと言いました。確かに過労で倒れたのでは意味がないので、もう一人同僚を探すことにしました。赴任する前に何とか三井物産出身でやはり日本語教授法を勉強していた男性を見つけることができました。しかし、学校はしぶく、二十四コマで三万円であるので、三万円を二人でシェアしてくれと言うのです。それも納得して、私たちは同年の七月一日にタリンに赴任しました。前任者からの引き継ぎや、色々な準備をして、九月の新学期から授業を開始したので、同僚は家の始末をしてから来るとのことで、九月の下旬にやってきました。

日本語の難しさⅠ（漢字の発音）

前置きはこれくらいにして、本論に入りますが、いよいよ日本語の授業を始めて一ヶ月後くらいでしたか、二年生のクラスで、教科書『日本語初歩』国際交流基金編）を読んでいたが、「日よう日」という言葉が出てきました。「よう」という漢字は難しいので、ひらかなで書いてあります。この言葉を読んだ時に、生徒の雰囲気がおかしいのです。

そこで気がついたのですが、同じ漢字を「にち」と読んだり、「び」と読んだりすることに、生徒はカルチャー・ショックを感じたようです。英語だって「a」と言う字は八個くらしいの音をあらわしますから、言語学的には、おかしいことではないのですが、今まで習ってきた「ひらがな」や「カタカナ」が一字一音でしたから、驚いたようです。一瞬、なんと説明したらいいか考えたのですが、まあ、「日本の漢字には色々な読み方があるんだよ」と云って誤魔化しました。

でも、外国人のビジネスマンに教える場合は、ある程度、詳しく教える必要があります。では、本当はどう説明するかですが、皆さん漢字の「呉音」「漢音」「唐音」をご承知とします。これに「慣用音」を加えて「音読み」としています。それと「訓読み」がありますね。日頃日本人は余り意識していませんが、適当に使いつけているのです。

例えば、「行」という字、修行（しゅぎょう）の「ぎょう」は呉音です。旅行（りょこう）は漢音です。行灯（あんどん）は唐音と言います。「行く」「行う」は訓読みです。

「日」ですが、「日常」は呉音、「当日」は漢音、「朝日」「九日」は訓読みですね。ですから「日曜日」の最初の「日」は呉音で、最後の「日」は朝日の「ひ」で、訓読みなんです。が、「連濁」という現象で濁音になります。連濁とは「語と語が接続する時、あとの語の最初の音が清音から濁音に変わる」と定義されています。

例を挙げますと、「やま」と「はと」を接続すると、「やまばと」になります。「やまどり」とか、「おやざる」等もそうですね。

名前（固有名詞）の場合、多いですね。崎山の場合は「崎」は「さき」ですが、山崎となると「さき」ですね。でも、「やまさき」とんと発音する人もいます。私の友達で「中田」と言う男がいましたが、人に「なかつ」と呼ばれると、「私はなかつです」と必ず訂正していました。

この「連濁」という現象は、例外も多く、理論的にすっきり説明できない厄介な問題です。名前の「大橋」は「はし」ですが、淀屋橋は「ばし」ですしね。地名の「両国」は「りようごく」ですが、「日米両国」と言う場合は清音です。

だから、この「日よう日」の「日」も、説明しだすと大変、良く使う言葉で、「休日」とか「元日」と「じつ」という発音もあり、また、訓読みでは「誕生日」、新聞「休刊日」となり、語の冒頭に来ると「日当たりがいい」とか「日の出」とかは濁らないです。

連濁を起こすのは「和語」だとされています。しかし、漢語でも、極めて日常化した漢語は連濁します。「株式」と「会社」は「かぶしきがいしゃ」となります。「夫婦」と「喧嘩」も「ふうふげんか」です。外来語は殆ど連濁を起こしません、室町時代に入ってきたポルトガル語の「雨」と「カッパ」は「あまがつぱ」です。だから「月曜日」なんかは

日常化した言葉なんですね。

後部要素に、既に濁音が含まれている時、連濁が阻止されます。「春」と「霞」は「はるがすみ」ですが、「春」と「風」は「はるがぜ」でなく、「はるかぜ」となります。これも例外があるのです。「なわばしご」がそうです。

以上の次第で、「日曜日」の発音を本格的に説明すると大変なのです。

なお、漢とか呉は中国の王朝の名前でなく、地名を表すようです。日本に何時頃から漢字が入ったかは難しい問題ですが、五、六世紀頃、中国南部の呉の地方（揚子江下流沿岸）の漢字音が伝えられました。これを「呉音」と言っています。

次に八世紀頃に、中国北部の都市、唐の長安付近の発音が伝わってきた、遣隋使、遣唐使らが向うで直接学んでもたらした発音です。これを漢音と言っています。

「唐音」ですが、これは十世紀以降の中国の発音で、宋、元、明、清時代の音で、今云った「明」みんとか、「清」しんは唐音ですね。日本人は「和尚さん」と簡単に読みますが、辞書を見ると、「和」は漢音では「か・くわ」で、呉音では「わ」です。「おしゅうさん」の「お」が唐音なのです。

最後の「慣用音」ですが、呉音でもなく、漢音でも、唐音でもない、それらを混用した

音があります。例えば、「平」という字ですが、呉音は「平等」の「びよう」、漢音は「平和」の「へい」で、「平仄」のように「ひよう」と読むのが慣用音、「天平」は「てんぴょう」ですね。

我々がよく使う字では、「通信」の「通」。これは漢音では「とう」で、呉音では「つ」なのですが、「つう」は実は慣用音なのです。「お通夜」くらいですかね、「つ」と読むのは。「おつうや」という人もいますが。

英語の百科事典なんかを見ますと、呉音・漢音・唐音のことは詳しく説明してありますので、そのコピーを見せて説明しますが、かなり上級の段階です。

日本語の難しさⅡ（長音）

外国人にとって日本語のどこが難しいか、例えば発音では「長音」ですね。長音が完全に出てくる人は、中々少ないです。例えば東京は、ほぼ「とうきょう」と発音しますが、初歩の人は「ときょう」となります。「統計」と「時計」の区別が出来ない。嘗て、ロシアのサンクト・ペテルブルグのエルミタージュ美術館に行った時のことです。ガイドが「外の驚」「外の驚」というので、窓から覗いたが何も見えない。実は「双頭の驚」の説明だったのですね。「そと」と「そうとう」の違いですね。このガイドさんは親子二代のガイ

ドだと威張っていましたが、それでもこの程度です。

我々はLとRの区別が中々出来ない。だからあまりえらそうに言えませんが。発音はその国の音韻組織が反映するので、教えるのは中々難しいです。

(注) 「双頭の鷲」は東ローマ帝国でヨーロッパとアジアに渉る統治権を象徴するために用いた紋章で、ロシアも帝政時代に国の大きさを誇って用いていたようである。

エストニア人は「濁音」の区別が苦手のようで、書き取りで「てんき」『天気』と「でんき」『電気』の区別が出来ない。我々も「て」と「で」とを発音してみると、舌の位置は殆ど一緒ですね。それが聞き取れないようです。

日本語の難しさⅢ (助詞)

でも、外国人には、やはり「助詞」が一番難しいようです。我々は特に意識せずに、「銀座に行く」とか「銀座へ行く」とか云いますが、外国人は「に」と「へ」はどう違うと必ず質問しますね。日本人はどちらを使っても違和感はありません。ただ、「買物に行く」「テニスに行く」の場合は、「へ」でも通じますが、やや「に」の方が多いように思えます。この「に」を「目的の行為のへに」と説明しています。例えば「遊びに来る」の場合は、まず「遊びへ来る」とは言わない。まあ、外国人に難しいだけではなく、教える

方も難しいです。

私も初めに述べたように、朝日カルチャーの「日本語教師養成講座」を受講して最初の「文法Ⅰ」の冒頭で、東京外国語大学の助教授だったかが「へ山に登る」と「山に登る」の違いを説明して下さい」と質問されて往生しました。そんなことを考えてもみなかったからです。でも、それを教えるのが外国人相手の日本語教師には必要なんですね。

「に」の用法だけでもいくつもあります。

先ず「場所（空間）」を指す場合、「机に本を置く」「雲が空に浮かぶ」の「に」。次に時間で「三時に行く」「授業中に携帯をかけてはいけません」の「に」。ですが、例外もあり「今日・昨日・今朝・毎年」等には「に」は使えません。「毎年」にこの行事はある」とは言いませんね。「毎年この行事はある」です。

次は「動作の帰着点・到達点」で、「銀座駅に着く」「山頂に達する」「たばこに火をつける」といった用法。

「作用や変化の結果」というのは「大人になる」「お酒を飲んで真っ赤になる」「英語に訳す」といった用法です。

「動作や作用の原因・理由」とは「借金に苦しむ」「暑さに倒れる」といった例。先ほど言いましたが、「動作の目的」というのもあります。「調査に赴く」「テニスに行く」で

すね。

「動作の対象」は「先生に憧れる」「恩師に会う」といった言い方。「接触の対象」ですが、これは「実物に触れる」とか「胸に聴診器をあてる」といった表現です。笑い話ではありませんが、「おしりにさわる」では、意図的か偶然かよくわかりませんが、「おしりをさわる」なら、かなり意図的な表現になりますね。助詞一つでかなり意味が変わってきますので要注意です。

くだいようですが、まだまだあります。「動作の相手」とは「弟に数学を教える」。「受身の場合に、その作用の原因をしめす」というのは「波にさらわれる」「風に飛ばされる」といった表現です。日本語には面白い受け身形があり、「雨に降られる」は「迷惑の受身」と言われています。「ストームに襲われる」もその例です。「使役の場合は、その作用の相手を示す」というのは「妹にお菓子を届けさせる」といった例。「比較・対比の目標」は「弟に劣る」「母親に似ている」。最後に「並列・添加（強意）」というのがあり、「今朝はトーストにコーヒーで朝食をした」「海が荒れに荒れて、船は難航した」。これはかなり難しい用法ですね。

助詞の中でも難物は「は」と「が」の違いの説明です。私がエストニアにいた時に、べ

ルリン日独センターと京都外国語大学の共催で、「ヨーロッパ日本語教師研修会」がドイツのベルリンであり参加しました。そこに二十四年一修の佐治圭三が同大学の教授として来ていて、その時彼から詳しく習いました。その一部を簡単に説明しましょう。

先ず、「が」と「は」には「初出」と「既出」という考えがあります。「昔々、おじいさんとおばあさんがいました」は「が」を使います。「おじいさんは山に芝刈りに、おばあさんは川に洗濯に行きました」と、一回出てきたものは「は」を使いますね。英語で Once upon a time, there are an old man and an old woman. となり、The old man went to mountain... となり、この場合、「が」「は」は英語の冠詞、a と the に対応します。英語国民は大変納得します。

次は従属文では「が」を使うという規則があります。「ある日、おばあさんが川で洗濯をしていると、大きな桃が流れてきました」という文は、最初の文が従属文になります。「は」は使いません。「私がスーパードライでビールを飲んでいる時…」は「私は…」とは言えませんね。

日本語では「象は鼻が長い」と「は」と「が」を一つの文の中で一緒に使うことがあります。外国人はどっちが主語だといいますが、我々は「象は」の「は」は主題又は話題の「は」と云います。「象というものは、鼻が長いのだ」の意味です。英語の「as to」の機

能に似ています。

「私が山本です」と「私は山本です」はどう違うか。これは、質問によって使い分けしますね。何人か人がいて、誰かが「どなたが山本さんですか」と聞けば「はい、私が山本です」と答えるでしょう。一方、会社の受付かなんかで、「あなたはどなた様ですか」と聞かれれば、「あつ、私は山本です」と答えるでしょう。日本人はそういうことを間違えずにやっているのですが、外国人は直ぐには理解出来ない。

日本語で有名な文に「うなぎ文」というのがあります。「私はウナギだ」という文で、英語に訳したら、妙な文になります。この意味は日本人なら「私が注文したのはウナギだ」ということは直ぐにわかりますが。

誰かが、「山本、今日は何にする?」と云えば、「私はカツどんだ」と答えます。ウェイトレスが、注文の品を運んできて、「カツどんはどなた?」と聞けば、「私がカツどんだ」と答えますね。この問答なんかは、本当に外国人には理解しがたいでしょう。

このように、助詞の使い方は、コンテクスト(文脈)によって、色々変わってきますので、外国人はそれになれてもらうより仕方ありません。

その外では、形容詞が活用することを理解できないようです。「安い」と「おいしい」

を「あのレストランは安くて、おいしい」と「安い」が「安く」となる。この活用現象はヨーロッパの言語にはないようです。

私はエストニアの高校で二年間教えたのですが、日本人が少ないために、社会人にも個人レッスンを延べ六十人位教えたと思います。だから学校との契約は二年でしたが、あと一年残って個人レッスンを続けました。また、私の教えていた高校の卒業生で日本語を続けたい者にも、無料で教えました。

一九九九年春に帰国しまして、何もしないつもりでしたが、頼まれたこともあり、ある人材派遣会社に登録して、日本に來た外国ビジネスマンに日本語を教えていました。この場合は、習う目的やレベルが違い、教える準備が中々大変でした。教える方法もローマ字だけで教えるやり方や、会話はほとんど出来るが漢字が読めないのです、漢字の学習だけとか色々でした。もう今は疲れるばかりで、登録はそのままですが、全く教えていません。でも、時々、「日本語スピーチ・コンテスト」の審査員を頼まれたり、外国で日本語を教える経験を話してくれと言われたり、まだ日本語教育との縁は切れない始末です。

エストニア語とは

日本語の話はこれくらいにして、よくエストニアではどんな言語が話されているのか質問を受けますので、エストニア語とは何かを説明しておきたいと思います。

ご承知のように、ヨーロッパの言語は、ラテン系、ゲルマン系、スラブ系等ありますが、言語系統学的には全て「インドヨーロッパ語族」に属します。ところが、フィンランド語、エストニア語とハンガリー語は「インドヨーロッパ語族」に属しません。フィンウゴル語族といわれています。「インドヨーロッパ語族」は所謂「屈折語」といわれ、フィンウゴルは、日本語と同じ「膠着語」です。あと、「孤立語」と分類される言語があり、中国語がそれに該当します。

従ってロシア語とは違います。お互いに全く外国語です。エストニア語はラテンアルファベットを使って表記されるが、その歴史はあまり古くありません。十六世紀に初めてエストニア語のテキストが現れています。

大きな特徴を申し上げますと、エストニア語に冠詞がありません。これはフィンランド語も同様です。私はハンガリー語については全く知識がありませんが、ハンガリー語に冠

詞らしきものがあるようですが、語源的には「指示詞」からの援用だと、ハンガリーの人から聞きました。

次に、三人称の主語で、*he* と *she* の区別がありません。つまり性別がありません。日本語も彼と彼女は明治以降に出来た言葉ですから、良く似ています。

それに後置詞があります、「Helsinki にいる」と言うとき、*Helsingissa* と語尾に「サ」が付きます。英語で *in Helsinki* と前置詞が付くのと異なります。日本語で「ヘルシンキで」とか「ヘルシンキに」と言うのと同じです。

発音面では、語頭に *r* 音が来ない、今は外来語があるので、ありますが、昔は日本でもなかった、「ロシア」は言いにくいので「オロシア」と言っていた。それに、これも池上先生から習ったのですが、母音調和という現象がある。

簡単に云えば、ある母音は、ある母音と同じ単語の中では共存しないということで、エストニア語では、一〇〇年ほど前になくなったようですが、フィンランド語には未だに残っています。日本も古事記や日本書紀が書かれた頃には残っていたことが証明されています。これも、三高出身の橋本進吉博士の詳しい研究があり、池上先生も研究しておられます。

ということで、エストニア語と日本語はかなり近い関係にあるようで、その点親しみが

もてますが、やはり文法は変化が多くて。中々難しく老人には覚え切れません。東大の松村教授という方が、この方面では専門家で、興味があれば、彼のHPをご覧下さい。

よくバルト三国の言葉は同じかと質問を受けますが、エストニア以外のラトビア、リトアニアはインドヨーロッパ語族に属します。ラトビア語とリトアニア語は違うようですが、両者をバルト語族といっているようです。リトアニア語はインドヨーロッパ語族の古い形を残していて、サンスクリット語に近い発音もあるらしいです。ヨーロッパの言語学者は一応リトアニア語を勉強するといわれていますね。有名な言語学者、ソシュールも勉強したらしい。

エストニア人は学校で早くから英語を習っていますし、高校ではドイツ語、ロシア語、フランス語等を選択して習いますし、フィンランド語は似ているのでほぼ理解できるようです。よほど田舎に行かない限り、英語は通じます。

ただ国際的に問題になっているのは、エストニアには「言語法」という法律があり、エストニアの国籍を取得するには、エストニア語でコミュニケーションできないと駄目なのです。エストニアが独立した一九一八年には人口のうち九〇%以上がエストニア人でしたが、ソ

連の占領から解放された一九九一年には、ロシア人が二五%近く占めるようになりました。その残留ロシア人はエストニアの国籍が欲しいのですが、彼らはエストニア語なんて勉強する気もなかったもので、いざ国籍をとろうとするとエストニア語ができないために拒否されています。これは人権問題ではないかとエストニア在住のロシア人はロンドンの人権委員会に訴えています。まだ全面的な解決に至っていません。

エストニアの地理・歴史

せっかくお時間を戴いたので、最後にエストニアの地理・歴史を簡単にお話ししておきましょう。

フィンランドからバルト三国にかけては「バルト台地」と呼ばれる固い地層があつて、今も北上を続けるインド大陸をしっかりと支えています。エベレスト山脈やアルプスの山々が風化しながらも高度が下がらないのは、エベレスト山脈も、アルプスの山々も「バルト台地」のお蔭で隆起をしているからです。バルト台地には高い山はありません。エストニアで一番高い山は三百七メートルです。日本ではほんの丘ですね。

面積は九州と同じくらいで、デンマークより大きいのです。人口は百五十万人位ですから、九州の福岡よりも少ないですね。ただ、湖や湿地帯が多いので、住めるところは限ら

れているようです。島も千五百もあり、無人島が多いです。

産業は林業や牧畜が主だったのですが、ソ連時代はエストニア人の能力が高いことから、色々工場を建てました。しかし経済効果を考えない施策だったので、私が渡航した時は、そのような工場が廃墟になっていました。今はいわゆるスモール産業、コンピューターや通信機器等の産業を誘致しています。

林業や牧畜ももちろん残っており、ログハウスの輸出なんかも盛んです。農産物もあり、ポルツマーというところで作られるジャムは美味しいので有名で、ソ連時代も宇宙飛行士が必ず持つて行ったという話もあります。

EUに入ってから、特に外資導入もあり、今まで国営の仕事をいくつか民間に委託して、例えば水道なんかも首都タリンではフランスの資本で供給しています。

この国の強みはエネルギーがあることで、国の北東部分にオイルシェールが埋蔵していて、それによる火力発電で、電気は輸出しているくらいです。

この国では八千年くらい前に、すでに人間が住んでいた痕跡があり、私も見ましたが五千年くらい前の墓地の遺跡が残っています。初めは狩猟民族でしたが、一世紀あたりから農耕民族となり定住を始めたと考えられています。六世紀にはローマの文献にも現れるよ

うになり、バイキング貿易の一端を担うようになりました。

十二世紀にプロシア方面から、「北の十字軍」と言われる武力によるキリスト教強制改宗が始まります。従ってエストニア地方はその頃まではアニミズムの世界でした。

結局同じように九世紀にキリスト教化したデンマークの王が、キリスト教団の要請を受けて北エストニアを制圧します。一二一八年のことです。今の首都タリンは「タ」が「デンマーク」の意味で、「リン」が城砦の意味で、すなわちタリンは「デンマークの城塞」という意味です。

その後スエーデンが版図を拡大した時、バルト三国もスエーデン領となります。スエーデンは教育熱心な国で、エストニアのタルツにヨーロッパで三番目に古いと言われるタルツ大学を設立しました。一六三二年と言われています。

一七〇〇年、バルト三国を狙っていたロシアのピョートル一世がスエーデンに戦争を仕掛け。二十年戦争、大北方戦争といわれる戦いとなり、結局ロシアが勝ちましたが、エストニアの土地も荒廃しました。

十九世紀にはいるとバルト三国も民族意識に目覚めることになり、日露戦争でロシアが敗北した一九〇五年には激しい革命運動が起りました。

余談ですが、日本海海戦で敗北したバルチック艦隊にはエストニア人も十数名水兵とし

て乗船していて、その内の戦死者は今もタリンのロシア正教教会に寝わっています。

その後、バルト三国は広く自治権を獲得しました。それが一九一八年の独立に繋がっていきます。

バルト三国はソ連と違って、民主主義的な政体と憲法を選びました。ヨーロッパ諸国は町論、日本もバルト三国を認め、国交を開きました。

ところが、この独立が二十年しか続かなかったのです。

一九三九年、ソ連はモロトフ／リッペントロップ協定に基づいて、フィンランド、バルト三国に侵入を開始します。その前の三十九年九月一日にナチスがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が始まっています。十月十八日にソ連は二万二千の大軍でエストニアに攻め入り、十一月三十日にはフィンランドを攻撃、その行為に対して国際連盟はソ連を除名します。

この時、フィンランドは強硬に抵抗しました。ソ連は三週間くらいでフィンランドを占領できるとふんでいましたが、森林の多い冬のフィンランドの戦いは困難を極め、三か月経っても終わらなかった。ソ連はフィンランドのカレルヤ地方の一部を割譲させる条件で停戦条約を結びます。その後色々な経緯はありますが、フィンランドは独立を保ちました。でも変なこともあるもので、フィンランドはソ連と戦ったということで、第二次世界大

戦では枢軸側、つまり敗戦国とみなされています。

バルト三国の場合は、国力から見て、とてもソ連と争うだけの力はありませんでした。止む無くソ連の占領を認めて、傀儡政府を設立します。国名も「エストニア・ソビエト共和国」です。当時を知っている人に聞きますと、選挙は一応あるのですが、強制的に傀儡政府の議員に投票させられたとのことでした。

その後、独ソ戦争が始まり、エストニアはナチスに占領されますが、その時は市民は大喜びしたと言います。ソ連よりまだナチスの方がましだったらしい。しかし、再びソ連が盛り返し、ナチスを駆逐します。その時以降、ナチに協力したと大勢の市民がシベリア送りされます。先ほどのべたヘイキさんの奥さんは当時まだ小さな子供だったので、目の前で両親がソ連兵に拉致され、その後生死も不明だそうです。員数合わせか、子供まで拉致された例もあるそうです。拉致された人数は人口の二十五％に及ぶと言われています。その後もソ連の占領は続くのですが、ゴルバチョフの雪解け以降、次第に再独立の気運が高まってきて、もちろん、独立運動も密かに、或いは表だって行われましたが、一九九一年八月に再独立を果たすことができました。

ここで日本との関係を少し述べておきますと、一九三九年にソ連が侵略したとき、国際

連盟の態度でもわかるように、欧米の各国はソ連の併合を認めませんでした。アメリカなんかはエストニアの旧政府の大使館を、そのまま存続させていました。また、各国はエストニアから逃げ出した人たちを保護しています。

日本政府はソ連におもねってか、ソ連がバルト三国を併合したことを認めて、バルト三国は消滅したとしています。私がエストニア赴任した時、両国の間にまだ租税協定もありませんでした。というのは、エストニアは一九一八年に独立した時に、日本と結んだ条約がまだ生きていると立場なのに対し、日本外務省は当時の条約は消滅したという立場で、新たに条約を結ぼうと言う考えなのです。

同じ旧ソ連から独立した国でもウズベキスタンとかカザフスタンとかは、新しく独立した国なので、どんな条約が結ばれましたが、バルト三国はそんなことで条約の問題が進んでいません。勿論、バルト三国には日本の大使館もあり、人間の行き来には問題ありません。

日本大使館と言えば、思い出しましたが、バルト三国には日本大使館はあるものの、トップは代理大使で、正式の特命大使は、エストニアはフィンランド大使が兼任、ラトビアはスエーデン大使の兼任、リトアニアはデンマーク大使の兼任となっています。

私が赴任した時は、民間からの初めての女性大使、高原須美子さんがフィンランド大使でした。経済企画庁長官も経験しておられる大臣級の人です。ご承知のように彼女の旦那は昭和二十二年文丙の高原富保です。

エストニアの日本語教育に関しても彼女に大変お世話になりました。日本の東大に匹敵するタルツ大学に日本語教室が開催できたのも、彼女のお蔭で、今もその教室の横の壁には「高原大使の協力により設立された」というボードがはめられています。

彼女はエストニアが好きだったらしく、時々渡航してこられ、私もタリンの高級レストランに招かれて、高原家によく集った三高出身者の思い出話を聞きました。酔っ払って泊まり込んだのもいたようです。二〇〇一年に亡くなれましたが、遺産の中から多額の金をタルツ大学に寄付されました。タルツ大学はそのお金で最新のコンピューターを購入したようです。

まだ話は尽きませんが、時間も超過したようで、この辺で終わりにさせていただきます。ご静聴有難うございました。

なお、日本語関係の著書は沢山ありますが、本日は三高出身者の著書を中心に紹介しておきます。

〔参考文献〕

- ・小川環樹・西田太一郎『漢文入門』岩波全書
 - ・一海知義『知っているようで知らない漢字』講談社
 - ・鈴木修次『漢語と日本人』みすず書房
 - ・高橋太郎ほか『日本語の文法―一九九四 4』私家版
 - ・佐治圭三ほか『日本語教師養成シリーズ 文法』東京法令出版㈱
 - ・佐治圭三『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房
 - ・渡邊実『日本語要説』岩波書店
 - ・渡邊実『日本語概説』岩波書店
 - ・酒入郁子ほか『外国人が日本語教師によくする一〇〇の質問』バベルプレス社
 - ・森本順子『日本語の謎を探る―外国人教育の視点から』ちくま新書
 - ・小泉保『縄文語の発見』青土社
- 〔辞書〕
- ・小川環樹・西田太一郎・赤塚忠『角川 新字源―改訂版』角川書店

（付言） 皆さんは三高時代も特に文科の方は、池上楨造先生、大城富士男先生、阪倉篤義

先生らに国語、西田太一郎先生らに漢文、漢字等を習っているので、日本語について十分知識をお持ちと思いますが、やはり外国人に教えるには、我々が勉強してきたのちよつと違いがあります。その専門家は、三高出身者では少なく、十四年文丙の高橋太郎、二十四年文丙一修の佐治圭三がいるくらいかもしれません。佐治は北京で五年ほど、日本語学校の校長をしていたので、特にこの分野は詳しいですね。

先ほど昭和二十二年理の山田啓夫氏より聞いたのですが、参考文献にある渡辺実先生も三高ご出身とか、存ぜず失礼しました。二十年文乙です。我々日本語学を勉強する上で、渡辺先生の本は大変参考になりました。池上先生の業績も詳しく説明されています。また、参考文献には載せませんでしたが、渡辺先生は『さすが！日本語』という啓蒙的新書も出しておられます。新書にして内容的に中々難しい所もありますが。

(横浜港北国際交流ラウンジ運営委員)